

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24243066

研究課題名(和文)生活史法による臨床物語論の構築と公共化

研究課題名(英文)On the methodology of Life History from the point of view of the clinical narrative approach

研究代表者

森岡 正芳 (Morioka, Masayoshi)

立命館大学・総合心理学部・教授

研究者番号：60166387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 34,200,000円

研究成果の概要(和文)：個人の生活史は単なる編年的記録ではない。生活史は構成的であり、現在の視点から選択的に出来事が配列される。本研究は生活史をナラティブの観点から基礎づけ、心理社会的課題の理解と解決に寄与する方法として提示することが目的である。対人援助場面において聴取された生活史の生成過程について検討を行った。その結果、生活史の方法論的独自性として、以下の3点が抽出された。(1)生活史が内包する時間の重層性、(2)記憶・想起の集合性と継承性、(3)出来事の個人の生における意味。生活史は個人の体験の世界を一貫して表現する方法であり、聞き手との共同構成のプロセスによって、当事者の自己形成と回復を支えることが示された。

研究成果の概要(英文)：The life history is not merely a chronological description on one's history. Life history is constructed by ordering personal events which are arranged and selected from the standpoint of the present moment. The aim of this research is to construct the basis of the life history as a methodology of the psychosocial support for people concerned.

The research group put the qualitative analysis on protocol data which was collected through interviews performed in social institutions. The findings are as follows. (1) There are multiple layers of temporality in the personal life story. It is significant task for investigating collaboratively the special moment of personal life, which is called the Kairos moment. (2) The act of remembering in the personal life story expresses the collectivity and the generativity of the autobiographic memory. (3) The personal life history is composed by units of events. The act of storytelling can make a useful meaning for subjective Self formation.

研究分野：臨床心理学

キーワード：生活史 ナラティブ 心理社会的支援 記憶想起 フィールド実践研究 心理教育

## 1. 研究開始当初の背景

(1)この研究では、心理社会的実践の基盤となる生活史(life history)に注目した。対人援助において生活史の聴取を、人間科学的実践的な方法として積極的に位置づけることを目標とした。方法としての生活史を人間科学に定位していくため、学際的な観点から、研究グループを編成した。心理学領域では Erikson(1958)と Lifton(1974)の心理歴史的方法が先駆的であり、ナラティブの実践研究方法として McAdams(1985)とやまだ(2000)のライフストーリー心理学がある。一方臨床場面において、Weizsäcker(1956)は医療の場において、生活史が病理学において独自の方法的意味を持つことを先駆的に見出している。病歴とは「病む人の物語/歴史」である。この物語には医療者も当の病む人との相互性の中で関与する。物語を聞くことは、人の病に「生きられていない生」が働く様を読み取ることである。

(2)生活史法の応用範囲は広く、医療や福祉領域だけでなく、生活史の記述や聴取を通じて世代をつなぐ実践分野が広がっている。回想法にもとづく高齢者の生活史聴取と心理社会的支援は定着している。フランスの生涯教育の領域では、人生の出来事を聞き取り、生活史を記述する実践が個人の自己形成に意味を持つことに着目し、個人の内面の自覚的な変化に迫るライフヒストリーの方法が展開している(Pineau,2000)。また日本文化で独自の展開を遂げた内観療法は親子のきずなを想起する方法であり、生活史聴取との関連は主要なテーマである。

(3)以上のように臨床実践と人間科学をつなぐところに生活史法が位置するが、生活史の聴取がいかんして意味生成的で、主体回復と世代をつなぐ社会的実践に役立つのか。その本格的解明はまだ乏しいのが現状である。従来の生活史聴取は「事実関係の収集」に終始していることが多い。生活史は個人の単なる歴史的事実の記録ではない。ナラティブの視点からすると、人は自らの現実を単に表出するのではなく、それを構成しながら意味を作り出す存在である。出来事の意味は個人の中に確固としてあるのではない。出来事は回想の時点で意味づけられ、筋立てられる。人は、自分の人生を連続した意味のある物語として時間軸上に配列し、組織化する。この自己物語は個人のアイデンティティや自己理解の土台となる。本研究は、自己物語という視点から生活史をとらえ、聞き手との関係によって変化する動的な方法論として確立することを目指し、進められた。

## 2. 研究の目的

本研究は生活史をナラティブアプローチの観点から基礎づけ、人間科学的諸領域における生活史の方法論を統合し、心理臨床、医療

看護、障害者の自立支援、コミュニティ教育などの心理社会的な実践場面において検討する。それによって、生活史法による臨床物語論を、社会の諸問題の理解と解決に寄与するものとして提示することが目的である。

## 3. 研究の方法

(1)本研究は、研究 ナラティブアプローチによる生活史法の構築および、研究 生活史法による臨床物語論の公共化、この二つに分けて行った。研究 では、ナラティブの4つの観点、時間の多層性 関係性の中でのストーリー構成 無意志的想起の働きを含めた回想 社会文化的文脈における出来事の意味、にもとづき、生活史の理論的基礎づけを行った。並行して、対人援助の実践領域(医療看護の実践場面、障害者総合支援施設での当事者支援者への聞き取り、司法矯正教育の場面、戦争体験を語り継ぐ実践グループ)において生活史の聴取を行った。研究 では、研究 で得られた資料にもとづき、定例の研究会(臨床ナラティブセミナー;研究期間中19回開催)にて分担研究者が集まり各視点から分析を行った。

(2)生活史の構成は物語(ナラティブ)を生み出すという基本的な心の働きを基盤とする。ナラティブの分析は、個人の生の文脈や世界観のなかで出来事が意味づけられ物語性が構築されるという意味でのマクロナラティブと、会話の微細部分に発話主体の意味行為の働きをとらえるミクロナラティブの両側面がある。この力動的関係に注目して、集団討議による事例検討を重ね、生活史に個人の内的テーマ、家族の物語、社会にドミナントな物語を重層的に読み取る方法をとった。生活史はマクロナラティブの枠組みが前提になるが、生活史を構成していく現場をとらえなおすと、ミクロナラティブがたえず働き、意味を生成していくプロセスがある。この分析を通して、個人の人生におけるライフストーリーの多水準性と統合イメージの形成プロセスを記述した。

## 4. 研究成果

心理社会的支援の場面においてナラティブ(物語;語り)とは、個人の体験の現実接近し、その意味を共有するための枠組みである。臨床場面でのナラティブアプローチは、実践と記述の双方に関わって汎用性のある視点を提供しうるものである。人々が抱える心理社会的困難は、生活上の出来事の意味と切り離せない。個人の内的な生のテーマとつながっている。このようなナラティブアプローチの独自の認識論をもとに、各フィールドで得られた記述を検討した結果、方法としての生活史について、以下の特徴を抽出した。(1)生活史が内包する時間の重層性、(2)記憶・想起の集合性と継承性、(3)出来事の個人の生における意味。これらの特徴に焦点づける

ことによって、生活史は独自の心理教育的実践方法であることを提示した。

#### (1)生活史が内包する時間の重層性

ナラティブの時間性は固有の特徴を持つ。計量可能な客観的時間にも、体験の主観的時間にも還元されない。ナラティブは継時性と共時性の二つの時間性の次元によって構造化されている。科学的記述による因果関係とは異なった次元として、準因果性の次元がある。これは「出来事」と「出来事」を関係づけたり、そこに類似の構造を発見したりする視点を提供する。当事者は自らの身に生じた出来事に対して「なぜ」を問うとき、準因果性の物語によって理由づける。そこに、複数の出来事が接続することで作られる継時的なストーリーラインが生まれる。共時性の次元は、特定の瞬間に異なる次元のストーリーが重層的に出現する時間性である。このような経験の決定的で意味深い瞬間を、カイロスの瞬間と名づける。時間経過を量的に測定できるクロノスと対比して、カイロスとは、今この出会いの中で、語りを通じてその人の生の姿が浮き彫りにされる瞬間である。継時性と共時性の時間は物語において相互に関連し合い重層的な構造をもつ。

本研究では時間の重層性というナラティブの観点から、生活史法の実践的特徴を明らかにした。対人支援場面では、その関係性に応じて、固有の時間が生まれる。当事者が自己を語る時、生じた出来事の時間順序がはっきりしないことがしばしばある。一方、医療場面の症例報告では、患者と医者間で語られたことの順序は、生物学的時間の均一な領域のなかでの出来事として再構成される。ここに体験との乖離が生じる。生活史は特定の時間枠組みの中で体験の素材を捉え再現し、体験の世界を一貫して表現するものである。そこに含まれるストーリーは出来事の前後関係と順序が筋立てられ、独立したストーリー世界を形成する。これによって当事者にとって体験に近い自己物語を得ることができる。

#### (2)記憶・想起の集合性と継承性

本研究では、生活史は個人において固定したものではなく、自らの体験をふりかえり他者と語り合う場面において生成されていくものであるととらえる。聞き手がいなかったら想起されないことがある。生活史の生成過程について、ミクロナラティブの場面をとらえ検討を行った。障害者総合支援、司法矯正教育、看護場面での会話場面がそのフィールドである。その結果、人の集まりや支援者との間で生じる会話において、無意志的に想起される出来事が、生活史の再構成に寄与することが明らかとなった。

本研究では、子ども時代に戦争を体験した市民への聞き取り調査をもとに、社会歴史的観点をふまえた生活史聴取の在り方を探求

した。災害や戦争の体験の記憶は、家族にも語られなかったままのものも多い。それを個人の生に歴史化することが生活者を支える意味を持つ。そこに立ち会う聞き手であることは、体験者自身との間に生じる葛藤や緊張を内包しつつ、アイデンティティを社会へと開く道のを伴走することである。個別の生における出来事が集合的、社会的な記憶へとつながる。自伝的記憶に編入されにくい記憶の聞き取りと記録の営みが、当事者の自己回復と社会へのつながりを生み、世代継承的な集合記憶の形式を整える。ここに、生活史の公共的な意味がある。

#### (3)出来事の個人の生における意味

語り手がはじめから固定した生活史をもっているわけではない。生活史を構成する単位は出来事である。出来事の意味は個人の中に確固としてあるのではない。出来事は回想の時点で意味づけられ、筋立てられる。本研究で推進したライフストーリー研究日仏国際シンポジウム(第7回;2016年2月28日神戸大学)では、「何でもないと思っていた私の人生は、語りだすと気づかなかったことが見えてくる」という参加者の感想があった。このように出来事の意味は聞き手と協働的に作られる。そして病や障害当事者の聞き取りから、出来事の意味は、時間的には事後的であり、世代継承的に構成されることが示された。生活史において出来事は、その人に固有の実存的意味に満ちた人生のエピソードとして、主体的に選ばれ、配列される。必ずしも、客観的事実としてのライフイベントとは一致しない。

方法としての生活史は、語られた出来事を選択、配列順序によって、どのような意味連関が生じるかに注目する。語りにあられる断絶や矛盾、質の異なる推論様式の揺れ動きを、語り手に固有の生の感覚としてとらえる。このような生活史的理解から、生活者の視点に沿った支援の道筋を描くことが可能となる。

本研究にかかわる実践の詳細は、『臨床ナラティブアプローチ - 協働報告 1-3』(ISSN2188-5834)にて報告されている。

#### (4)本研究の意義

生活史は「客観的事実」の年代記的記述ではない。生活史の構成は物語を生み出すという人間の基本的な特徴を基盤とする。生活史は構成的であり、現在の視点から選択的に出来事を再構成する。生活史にかかわる資料、素材について、それが聴取された社会文化的文脈を把握し、記述することが欠かせない。生活史の協働構成と想起のプロセスは、当事者の自己形成と回復を支える。生活史の実践は、当事者の視点に沿った支援の道筋を描く。以上の特徴から、生活史は特定の時間枠組みの中で、生活者が語る体験の素材を捉え再現し、体験の世界を一貫して表現する方法であり、

人間科学における認識の新たな枠組みを与えることが示唆された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 52 件)

1 紙野 雪香. 経験を意味づけるナラティブアプローチ研修-看護管理研修における「語る-聞く」場の創造. 看護管理. 27-4, 290-296. 2017. 査読有.

2 森岡 正芳. 言葉に時間を読む - 治療的コミュニケーション特集にあたって. 臨床心理学 16-5, 513-517. 2016. 査読無.

3 森岡 正芳. ナラティブ実践研究の成果と課題 - 看護ケアの場面において. N: ナラティブとケア 7, 82-88. 2016. 査読無.

4 Morioka, M. Remembering: A Story of Loss and Recovery of the Self. *Jung Journal: Culture & Psyche*. 10-1, 96-103. 2016. 査読有. DOI:10.1080/19342039.2016.1119002

5 紙野 雪香. ナラティブ看護実践の試みと未来. N: ナラティブとケア 7, 2-5. 2016. 査読無.

6 野村 晴夫. クライアント・ナラティブと心理療法の多元性. 大阪大学大学院人間科学 紀 要 42, 257-272. 2016. <http://doi.org/10.18910/57218> 査読有.

7 丸橋 裕. 医学的人間学と臨床哲学とのあいだ ヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカーと木村敏. 現代思想 臨時増刊号 総特集 木村敏 臨床哲学のゆくえ. 44-20, 164-185. 2016. 査読無.

8 森 茂起. 人生史の共有を目指して: 自伝的記憶に焦点を当てた虐待臨床. 子どもの虐待とネグレクト 18- 3, 318-326. 2016. 査読有.

9 森 茂起. 戦争体験と子ども虐待 ト라우マの世代間連鎖から考える. 子どもの虐待とネグレクト 18- 2, 189-213. 2016. 査読有.

10 Nomura, N. and Matsuno, K. Synchronicity as Time: E-series Time for Living Formations. *Cybernetics and Human Knowing*. 23, 69-77. 2016. <http://www.ingentaconnect.com/contento/imp/chk/2016/00000023/00000003/art0005> 査読有.

11 田代 順. ナラティブなグループアプローチを体験する(その 6) - 多声的対話グループによるナラティブな集団的「自例」検討. 集団精神療法 32-2, 2016. 査読有.

12 Morioka, M. How to create MA-The Living Pause-in the landscape of the mind: the wisdom of Noh Theater. *International Journal for Dialogical Science*. 9-1, 81-95. 2015. 査読有. [http://ijds.lemoyne.edu/journal/9\\_1/index.html](http://ijds.lemoyne.edu/journal/9_1/index.html)

13 村久保 雅孝. ナラティブ・アプローチによるエンカウンター・グループ体験の日常性

に関する考察. 東亜臨床心理学研究(東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理学専攻紀要) 14. 35 - 47. 2015. 査読有.

14 森岡 正芳・山本 智子. 発達障害概念の社会性 - 人は障害をどう生きるか. 臨床心理学 14-2, 168-173. 2014. 査読無.

15 紙野 雪香. ナラティブ・アプローチに基づいた看護実践のとらえ直し. 奈良女子大学大学院人間文化研究科年報 29. 23 - 32. 2014. 査読無.

16 野村 晴夫. 生活史面接後の『内なる語り』: 中高年の不随意的想起に着目した調査. 心理臨床学研究 32, 336-346. 2014. 査読有.

17 野村 晴夫. ナラティブ・アプローチが照射する心理臨床の主観と客観: 協同構成される物語の方向性と共有可能性に着目して. 人間性心理学研究 32, 79-86. 2014. 査読有.

18 森岡 正芳. 言葉の臨界 - 質的なものの行方. 質的心理学フォーラム 5, 57-63. 2013. <http://www.jaqp.jp/forum/forummokuji/#v015> 査読有.

19 森岡 正芳. 現場から理論をどう立ち上げるか-臨床ナラティブアプローチを手がかりに 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 6-3, 7-12. 2013. 査読無. [http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle\\_kernel/81005353](http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81005353)

20 森岡 正芳・山本 智子. 心理的対人援助にナラティブの視点を活かす 聴くことによる創造. N: ナラティブとケア 4, 2-8. 2013. 査読無.

21 山本 智子. 『語り』を意味づける意識化された私と意識化されない私 - 「不登校」事例の検討を通して意味生成の多様性を探る - . 近畿大学教育論叢 24-2, 57-75. 2013. <http://id.nii.ac.jp/1391/00011423/> 査読有.

22 紙野 雪香. 感染管理看護を拓くナラティブ・アプローチ 語る、動く、育む . 感染管理看護研究会誌 2, 1 - 5. 2013. 査読無.

23 廣瀬 幸市. ナラティブからみた事例研究の積極的意義. N: ナラティブとケア 4, 16-22, 2013. 査読無.

24 廣瀬 幸市. 事例検討における多視点的アプローチ試論 - “メタ心理学的に読む”ことを通して - . 日本臨床心理身体運動学研究 15-1, 3-18. 2013. 査読有.

25 真栄城 輝明. 心理療法としての内観 narrative (語り) の観点から. N: ナラティブとケア 4, 53-61, 2013. 査読無.

〔学会発表〕(計 30 件)

1 末本 誠. ライフヒストリー教育の実際 短期大学での経験を基に . 第 2 回キャリア教育研究国際セミナー. 2016 年 11 月 27 日. 湊川短期大学(兵庫県・三田市)

2 森岡 正芳・廣瀬 幸市・松本 佳久子・黒羽 カテリーナ. When the living moment is created in the therapeutic dialogue.

第9回国際対話的自己論学会. 2016年9月9日. ルブリン(ポーランド)

3野村 晴夫・井倉 未樹・川島 依子・中園 佐恵子・森岡 正芳. Narrative and Remembering in the Autobiographic Memory :Thematic Session. 2016年7月26日. 国際心理学会 ICP2016. パシフィコ横浜(神奈川県・横浜市)

4山本 智子・針多 暁子・井倉 未樹・森岡 正芳. 発達支援へのナラティブアプローチ 当事者の発達違和感を聴く. 日本発達心理学会第27回大会会員企画シンポジウム. 2016年4月30日. 北海道大学(北海道・札幌市)

野村 晴夫. 内的生活史と語り. 第7回日仏ライフヒストリー研究国際シンポジウム. 2016年2月28日. 神戸大学 (兵庫県・神戸市)

真栄城 輝明. 人生を想起するということー内観療法. 第7回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム. 2016年2月27日. 神戸大学 (兵庫県・神戸市)

7末本 誠. 自己意識の確立から社会変革へ ヒロシマ/ナガサキとフクシマの間. 第6回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム. 2014年12月4日. リール第3大学(リール・フランス)

8森岡 正芳. まだよく生きてこなかった生の歴史を聴く. 第6回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム. 2014年12月4日. リール第3大学(リール・フランス)

9廣瀬 幸市. 一事例に関わることにより生成される自己成長. 第6回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム. 2014年12月4日. リール第3大学(リール・フランス)

10松本 佳久子. Musical Narrative とその意味作用 少年受刑者によるライフヒストリーの語りの変容から. 第6回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム. 2014年12月4日. リール第3大学(リール・フランス)

11吉川 麻衣子・村久保 雅孝・門池 啓史・山本 智子. 沖縄戦の体験者の語り. 公開シンポジウム 語り 風土と生活史 心のケア. 2014年2月22日. 石垣市民会館(沖縄県・石垣市)

12末本 誠. ライフヒストリー成人教育の教育論的位置. 第5回ライフヒストリー研究日仏国際シンポジウム. 2014年2月1日. 神戸大学(兵庫県・神戸市)

13真栄城 輝明・山口 智子・田代 順・野村 直樹・野村 晴夫・森岡 正芳. ナラティブアプローチの可能性 -生活史をどのように聴くか. 日本心理臨床学会第31回大会秋季大会自主シンポジウム. 2012年9月14日. 愛知学院大学(愛知県・日進市)

〔図書〕(計15件)

1山本 智子. ミネルヴァ書房. 発達障害がある人のナラティブを聴くー『あなた』の物語から学ぶ私たちのあり方ー. 2016.

199

2森岡 正芳編著. ミネルヴァ書房. 臨床ナラティブアプローチ. 2015. 300

Suemoto, M. Le feu nucléaire au Japon, survivre à Hiroshima, Nagasaki et Fukushima. L' Harmattan. Galvani, P., Pineau, G. & Taleb, M. (coord.) Le Feu Vécu - Expériences de feux éco-transformateurs. (pp.261-276). 2015.

末本 誠監修. 神戸大学大学院人間発達科学研究科ヒューマンコミュニティ創成研究センター. 語り合う自分史. 2015. 71

丸橋 裕. 生のうちなる死 V. v. ヴァイツェカーの 医学的人間学 の可能性. こぶし書房. 日独文化研究所編. 生と死 日独文化研究所シンポジウム. (pp.181-215). 2014

森 茂起. 自伝的記憶の整理としての心理療法 ト라우マ性記憶の扱いをめぐって. 平凡社. 森 茂起編著. 自伝的記憶と心理療法. (pp.12-41). 2013

森岡 正芳. 人生のナラティブと心理療法. 平凡社. 森 茂起編著. 自伝的記憶と心理療法. (pp.71-92). 2013

アンダーソン, H. ・ゲーリシャン, H. ・野村 直樹著訳. 遠見書房. 協働するナラティブ. 2013. 152

末本 誠. 福村出版. 沖縄のシマ社会への社会教育的アプローチ -暮らしと学び空間のナラティブ. 2013. 368

〔その他〕

定期刊行物『臨床ナラティブアプローチ - 協働報告 1-3(2014 - 2016)』(ISSN2188-5834)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

森岡 正芳(MORIOKA Masayoshi)  
立命館大学・総合心理学部・教授  
研究者番号: 60166387

### (2)研究分担者

廣瀬 幸市(HIROSE Koichi)  
愛知教育大学・教育学研究科・教授  
研究者番号: 10351256

紙野 雪香(KAMINO Yukika)  
大阪府立大学・看護学研究科・准教授  
研究者番号: 10294240

真栄城 輝明(MAESHIRO Teruaki)  
佛教大学・教育学部・教授  
研究者番号: 10555692

丸橋 裕(MARYHASHI Yutaka)  
兵庫県立大学・看護学部・教授  
研究者番号: 10202334

松本 佳久子(MATUMOTO Kakuko)  
武庫川女子大学・音楽学部・准教授  
研究者番号：90550765

森 茂起(MORI Shigeyuki)  
甲南大学・文学部・教授  
研究者番号：00174368

村久保 雅孝(MURAKUBO Masataka)  
佐賀大学・医学部・准教授  
研究者番号：20241151

野村 晴夫(NOMURA Haruo)  
大阪大学・人間科学研究科・准教授  
研究者番号：20361595

野村 直樹(NOMURA Naoki)  
名古屋市立大学・人間文化研究科・名誉教授  
研究者番号：80264745

佐藤 達哉(SATO Tatsuya)  
立命館大学・総合心理学部・教授  
研究者番号：90215806

末本 誠(SUEMOTO Makoto)  
神戸大学・人間発達環境学研究科・名誉教授  
研究者番号：80162840

田代 順(TASHIRO Jun)  
山梨英和大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：90279737

山口 智子(YAMAGUTI Satoko)  
日本福祉大学・子ども発達学部・教授  
研究者番号：00335019

山本 智子(YAMAMOTO Tomoko)  
近畿大学・教職教育部・准教授  
研究者番号：50598886